



# 第1分科会

## 「地域人材を教室に呼ぼう！～国際理解教育からキャリア教育まで繋がる繋げる地域人材活用術～」

●担当：渡邊太（山形市立西小学校／FKG 米沢）、阿部眞理子／小笠原直子（認定 NPO 法人 IVY）

舟山康貴（飯豊少年自然の家）、高橋泰行（JICA 東北）、三澤香織（JICA 山形デスク）

●協力者：百瀬美奈子（山形県立鶴岡南高等学校）、中村絵乃／伊藤容子（開発教育協会）

ミチコ・ヨシノ（山形県国際交流員）、ドース・ビンセント／チリムゲ（AIRY サポーター）

●分科会のねらい・目的：

- ・国際理解教育で地域人材（リソースパーソン）を活用することの利点や効果を知ってもらう。
- ・地域人材を、より効果的に、気軽に活用するためのポイントを知ってもらう。
- ・教員とリソースの意見交流を通して、異文化理解に留まらない地域人材の活用の可能性について探る。

●参加者人数：16名

### 1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
アイスブレーク： 進行：舟山 康貴	<p><u>部屋の4隅</u></p> <p>様々な質問から最後に「地域人材の経験回数は？」という問い合わせで4隅に分かれたところ、「0回」「1回」が多く、複数回経験したことがある参加者は1名という結果になった。その後、グループ作りを行った。担当者（舟山）が太鼓を演奏しながら軽妙な語り口で進行することで、和やかな雰囲気で分科会を始めることができた。</p> 
ワークショップ 進行：阿部 真理子 パネリスト： 高橋 泰行 (派遣国：ペルー) 職種：観光 小笠原 直子 (派遣国：シリア) 職種：幼児教育	<p><u>リソースパーソン活用場面を考えよう（青年海外協力隊経験者（以下 OV）とのパネルトーク）</u></p> <p>【学校（授業）で協力隊 OV に講演をしてもらうとしたら、どのようなテーマで話してもうことができるかを考える。】</p> <p>異文化理解を目的に、派遣先の国の生活や文化の紹介をしてもらうケースが多いが、OV が現地で活動する前の意気込みと赴任後の現地でのギャップ、失敗したこと、挫折したこと、そしてそれをどう乗り越えたか等を聞くことで、異文化理解だけではない授業が可能であることに参加者が気付く。</p>  <ol style="list-style-type: none"><li>① パネルトーク 「どのような活動をしてきたか」「価値観が変わったことは」「失敗から学んだことは」などについて話を聞いた。</li><li>② パネルトークを聞いて、学校（授業）でどのような活用ができるかをグループで話し合った（付箋紙に書き、模造紙にまとめる）。</li><li>③ 各グループで話し合われたことを発表。 (所感) -青年海外協力隊に応募したきっかけや動機、現地で活動する中でどのような壁にぶつかり、どうやって乗り越えたのか、そこで気づいたこと、どのように価値観が変わったのかなど、個人にフォーカスしてじっくりと話を聞いていった。参加者は、日本との文化や生活様式、</li></ol>

	<p>人々の感覚の相違点や共通点を考え、様々な気付きが得られたと考えられる。人によって聞く際の視点が違うので、グループで話し合うときにまた新たな気付きが生まれた、今回、2つの国と職種を比較して話を聞けたことも、多くの気付きにつながった。</p> <p>-「幼児教育」や「観光業」というのはどのような仕事なのか、そこで働く人たちがどういったことを考え、どのようなことを大切にしているかが断片的にではあるが話の中に出でており、協力隊OVの話は、子どもたちが「仕事」や「働くこと」について関心を持つきっかけにもなり「キャリア教育」にも繋がっていくと感じた。</p>
<p>実践事例紹介 進行：渡邊 太</p>	<p><u>初級編：渡邊（山形市立西小学校）より、比較的簡単に依頼できる内容の実践事例紹介</u></p> <p>-異文化理解を目的に JICA や国際交流員（CIR）へ出前講座を依頼し派遣先の国の生活や文化の紹介をしてもらうと、学校での出前授業の経験も豊富なので、事前の打合せも比較的簡単にできるため、依頼しやすい。</p> <p><u>上級編：百瀬美奈子教諭（山形県立鶴岡南高校）の実践紹介と質疑応答</u></p> <p>-リソースパーソンである協力隊OV（派遣国：ルワンダ、職種：小学校教育）や IVY（イラクにおける難民支援、カンボジア算数教育支援）の話は、英語の単元で扱った内容が生徒に説得力を持って受け入れられることにつながり、意識も高くなった。活動者から直接話を聞くことで学びが深まると同時に自分に引きつけて考えることにつながり、そこから今までとは違った目標に向かっていく姿が、生徒たちの感想からも読み取れた。</p> <p>-そういう学びを生み出すためには、教師の「繋ぐ力」が重要だということも改めて感じた。リソースパーソンに学校に来てもらい、授業をしてもらう前に、下地となる基礎情報に触れておくといった細部の繋ぎだけでなく、「英語探求」という学校設定科目のなかで、今の世界やこれから自分たちが切り開く未来といった大きなテーマを、より具体的に捉えることができるよう授業を組むこと、テキストだけでなく複数のリソースパーソンという生きた教材を活用することが必要である。「様々な問題」を繋ぎ合わせ、多面的に捉え、さらには同じ「人」として「今の自分、未来の自分」をも重ね合わせられるような大きな繋がりの仕組みを生み出す力が求められる。</p> <p>(所感)</p> <p>細部を大切にしながらも大きな繋がりの仕組みを生み出す力＝資質を教員が持つためには、「常にアンテナを高くすること」「人と関わりつながることを楽しむこと」「その道に詳しい人を想像し、直接コミュニケーションをとる行動力を大事にすること」などが大切だという百瀬先生の言葉が大きなヒントとなったと思う。</p>
<p>(午前の部終了)</p>	<p><u>リソースアピールタイム</u></p> <p>JICA：高橋泰行、IVY：小笠原直子、CIR：ヨシノ・ミチコさん、AIRY サポーター：ドース・ビンセントさん、チリムゲさん、それぞれに「学校でどんな活動をしてきたか、こんなこともあります、やってみたいです」という話をしてもらった。</p> <p>(所感)</p> <p>団体情報を一覧にまとめた資料を作成し、配布しただけなく、リソースパーソンが並んで一人ずつ話をしていくことで、こういったリソースパーソンがいるのだということ（どのリソ</p>

	<p>スが何を得意にしているのか）を端的に分かりやすく知ってもらうができた。</p> <p>特に、ミチコさんやビンセントさん、チリムゲさんといったALT以外のリソースパーソンとして活用できる外国の方と教員が繋がる機会というのは多くないので、貴重な出会いの場になった。</p>
<p>リソース活用体験</p> <p>リソースパーソン：</p> <p>ヨシノ・ミチコ</p> <p>ドース・ビンセント</p> <p>チリムゲ</p> <p>槙 正智</p> <p>大沼 文香</p>	<p><u>リソース活用体験（テーマトーク）</u></p> <p>グループワークで、リソースパーソンを中心に、参加者それぞれが以下2つのテーマについて話した。</p> <p>テーマ①「あなたにとっての豊かさとは？」</p> <p>テーマ②「13歳のときの私」</p> <p>どちらのテーマも、その人からしか聞けない話を聞くことができ、参加者は興味深さそうに耳を傾けていた。</p> <p>(所感)</p> <p>話される内容は個人的なことなのだが、そこからそれぞれの国の文化や人々の価値観の違いなどに気づくことがあった。また、参加者自身も自分の話をしたことで、教える／教えられるといった関係性ではなく、経験を共有するといったよりフラットな立場で話を聞き、リソースパーソンやその語られる話をより身近に感じながら聞くことができた。</p> 
<p>ワークショップ</p> <p>講師：伊藤 容子 (DEAR)</p>	<p><u>今回の分科会からの学びや気付きの共有</u></p> <p>グループワークと全体共有で今回の分科会で得られた気づきや学びをふりかえった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現地のニーズの把握が大切。</li> <li>・年齢や経験の違いによって、同じ山形の人でも違う。</li> <li>・国際理解を通して『いじめ』について考えるきっかけになった。</li> <li>・異年齢、異職業で話すことで気づきがあったが、学校ではそういった場面が少ない。』</li> </ul> <p>以上、様々な気付きを共有することができた。</p>
<p>ワークショップ</p> <p>進行：小笠原 直子</p>	<p><u>リソース活用の心得</u></p> <p>リソース側からの視点として、リソースパーソンを依頼するときのポイントを下記紹介した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・丸投げはせずに、教師も意図（どういった話をしてほしいのか、子どもたちにどんなことに気づいてほしいか、考えてほしいか）をもってリソースパーソンを活用した方が、効果的な活用となる。</li> <li>・どんな生徒たちなのか、前後の授業（単元構成、目標）についても伝えてもらえると、リソースパーソン側もイメージが湧き、話題や資料の準備がしやすくなる。</li> <li>・リソースパーソンのことを知ることで、総合だけでなく、道徳やその他の教科など様々な場面での活用ができる。</li> </ul> <p>教師側の視点として、「『子どもたち』に何を学ばせたいか、考えさせたいかという視点だけでなく、一人一人の『子ども』の興味・関心にマッチングするという視点を持つことで、リソースパーソンにどんなことについて話してもらうのかが具体的に見えてくるのではないか」ということを伝えた。</p>

昼食休憩のときに参加者に簡単な名刺（名前と所属など）を作ってもらい、今回、参加していただいたリソースパーソンにも名刺を準備してもらい、名刺交換を行った。

（所感）

午前と午後でメンバーを替えてグループワークをしたことで、リソースパーソンを身近に感じてもらえたようで、積極的に話しかけている参加者が多かった。分科会の中だけでは、繋がりを持つまでは難しいので、今回の名刺交換会が、繋がりをつくる小さなきっかけになったようだった。



## 2. 参加者アンケート

- ・地域人材を教室に呼ぶことの成果を実感することができました。楽しかったです。
- ・具体的な実践や海外での経験を聞くことができ、学校に国際理解の風を吹かせるイメージができました。
- ・自分が知っている人だけではなく、知らない人と意見を交えることで、より新たな考え方を知ることができました。外国の方と学校のこと以外で話すのは初めてだったので日本の外を身近に感じることができて本当によい機会になったと思います。
- ・異年齢、異職種の方々と国際理解について自分しか見えない一面ではなく、様々な角度から考えることができ、楽しかったし、より深く考えていかなければいけないと感じた。来年またこのようなフォーラムに学校の仲間を誘つて参加したいと感じた。

## 3. 担当者所感

【ファシリテーター：渡邊 太（山形市立西小学校／FKG 米沢）】

今回は、様々なセッションやワークショップを組んだことで、学校でのリソースパーソン活用の可能性をいろいろな角度から切り取ることができたと思う。特に、IVY や CIR、AIRY といった組織というよりもより個人にフォーカスしたことで、リソースパーソンを活用することの良さを、体験を通して実感できるような分科会になった。参加者が「面白い」と感じたことが、「学校でやってみたい」「子どもたちにも経験させたい」に繋がるので、良いきっかけづくりの場になったと思う。

＜良かった点＞

- ・参加者の満足度が高くなった要因として、グループファシリテーターの存在が大きかった。分科会の主旨を理解した上で、グループのメンバーから意見を引き出す役割を担ってもらえたので、参加者同士の話し合いが促進された。
- ・対象と考えていた教員の参加は少なかったが、高校生や一般の方々の参加もあり、世代や職種を超えたグループワークができたことで、結果的に様々な意見や経験談が聞けたのがよかったです。
- ・こういった様々な立場の人が集まって、1つのテーマについて自分の考え方や経験を話す機会は普段あまりないが、今回世代のギャップがある中で「持続可能な豊かな社会」について議論を行い、お互いの「豊かさ」に対する視点の違いを知る機会となった。
- ・参加者が少なかった分、リソースパーソンとの距離が近く、彼らの魅力を直接感じる場となったことはとても有意義だった。

＜改善すべき点＞

- ・分科会のチラシも作成して広報を行なったが、教員の参加者が少なかったのは課題として残った。次回へ向けてテーマ設定、広報共に検討が必要である。